

「きのふはけふの物語」の語彙

金地院本の名詞語彙について

道井 登

(1) はじめに

さきに金沢近世語研究会で、金地院本を底本にして、寛永十三年刊本、大東急本（岩波古典大系）の三本対照本文による総索引を作製した。それによって、以下

- (一)、名詞語彙―意味分類による計量的な特色
- (二)、人倫の語彙
- (三)、人倫以外の語と俳諧類船集の語との比較
- (四)、漢語

の順序によって考察をすすめたい、動詞、形容詞、形容動詞の語彙、副詞の語彙、助動詞、助詞の語彙については、紙幅の都合上、別の機会に譲りたい。

(2)、名詞語彙―意味分類による計量的な特色

名詞語彙の研究方法については、馬淵和夫氏が、「1 出自よりの（和語・漢語）、2 時代的な（上代語、中古語等）、3 品詞別による、4 意味分類的（天文、人事等）、5 文学ジャンルによる（歌語、非歌語等）、6 位相的な（訓読語、女性語等）、7 文体的な（和文、和漢混交文等）、8 計量的な、9 その他」の研究分野、方法を指摘され、「意味分類」の分野では、阪倉篤義、伊牟田経久、浅見徹、山内洋一郎の各氏などの「意味分類」の視点についての研究が

ある。これらの意味分類法の研究をもとにして、昨日は今日の物語の名詞を分類し、語を計量的に整理すると（表1）となる。

（表1）昨日は今日の物語の名詞語彙

分類観点項目	語数	%	語 例
1 自然・自然現象の語	351	12.3	
(イ)天地・現象・自然変化	32	1.1	水・山・月・けふり・紅葉
(ロ)植物・動物	110	3.9	山椒・牛蒡・馬・牛・しらみ
(ハ)人体・生命	209	7.3	汗・手・口・声・煩熱
2 人間活動の主体の語	756	26.5	
(イ)個人・人間・家族			信長公・僧・医者・連歌師
仲間・階級・職業	667	23.4	女房・うつけ・奈良屋
(ロ)持仏・精霊	102	3.6	仏・念仏・遠夜・幽霊
(ハ)社会・機関	7	0.3	奉行・代官・内裏
3 人間活動の語	827	29.0	
(イ)精神的行為			知恵・来世・誓文・文盲
肉体的行為	659	23.1	成仏・旅籠・死出三途
(ロ)言語・創作・芸術	128	4.4	謡・芝居・学文・秀句・一字
(ハ)経済・交際	47	1.7	算用・四石・礼物・孝行
4 生産物・用具・物品	333	11.7	
(イ)食物	82	2.9	米・飯・茶・酒・田楽
(ロ)住居・道具	107	3.8	柱・建臺・天目・座敷
衣料	(13)		衣・ふんどし・おび
(ハ)造貨物	144		風呂屋・大徳寺・陳
田・道・畑	(36)	5.0	道 辻
5 抽象的關係の語	586	20.5	
(イ)年月・季節・時間	177	6.2	毎年・朝夕・おひる・秋
(ロ)方向・關係・場所	191	6.7	前・上・所・隣・関東
(ハ)状態・數量・形	96	3.4	天下一・三文・八つ・みいろ
(ニ)こと・もの	122	4.3	

（表1）から昨日は今日の物語の名詞語彙を考察すると、人間活動の主体の語彙（二六・五％）、人間活動の語彙（二九％）で名詞語彙の半分以上を占めている。表の1の(イ)（七・三％）や4の(イ)(ロ)

(二七・一%)の人間及び人間活動に直接的に関与するものを含めると、名詞語彙の九〇%にもなり、自然に対して心情を吐露する作品と異なり、人間そのもの、または、人間の行為そのものを対象にする作品であると言える。とくに、表の2の(イ)(人倫)に関する語(二三・四%)は名詞語彙の四分の一を占めている。このことは登場人物に関する語が多いというだけでなく、公家から衣食までの幅広い人たちを登場させていることを示している。このことについては(3)の人倫のところで考察するが、昨日は今日の物語は、岡雅彦氏も指摘しているように、登場人物、または話者の言葉の洒落を中心にして構成された物語であると言える。

登場人物人倫以外の、話の筋や内容の中心になる語は、人間活動の語彙(二九%)、生産物、用具、物品に関する語彙(イ)、(ロ六・七%)、自然、自然環境の語彙(ロイ)一・二%)にまとめられる。これらの語は昨日は今日の物語の説話の笑いの種となる語であり、また、笑いをおこさせる核の語でもある。これらの語については(4)の俳諧類船集の語との比較のところで考察したい。

笑い話の背景を構成する語は、自然、自然環境の語彙(イ)一、一%)、生産物、用具、物品の語彙(ロ五%)、抽象的関係の語彙(二〇・五%)に整理される。以上が、昨日は今日の物語の意味分類における計量的な面での傾向である。

(3)人倫「個人、人間、家族、階級、職業」の語彙、

(表1)の2の(イ)の人倫に関する語が計量的に多く用いられていることについては上述した如くであるが、その語彙を「寒川入道筆記」「戲言養気集」のそれらの語彙と比較すると表2のようになる。

(「寒川入道筆記」「戲言養気集」「醒睡笑」の作品の特色については、岡雅彦氏の考察がある。) 昨日は今日の物語に登場する人物で「織田信長、秀吉公、秀忠公」等の実名が用いられるのは限

(表2) 人倫「個人・人・家族・仲間・階級」の語彙

分類項目 (人名も含む)	(頻度数における各作品 内での占める割合)	昨日 は今日 の物語	寒川 入道 筆記	戲言 養気 集
1 公家・武家等の語	4.8	18.2	39.3	
2 僧・坊主・貧僧・順礼等の語	18.9	5.1	8.2	
3 稚児・若衆・(念者)等の語	11.5	1.1	10.8	
4 連歌師・医師等の語	4.0	12.3	44.3	
5 僧屋・飯屋・奈良屋等の語	0.8	3.5	0.4	
6 あほう・うつけ・下人・京童等の語	3.7	4.5	5.6	
7 人・者・男・女等の語	24.3	21.7	16.3	
8 親・子供・女房・父親・姉・老人等の語	15.0	9.3	4.0	
9 我ら・そもし・おこ・汝・貴所等の語	14.8	4.3	7.1	
10 上下・方民等の語	0.8	2.8	2.4	
11 「定家・清盛」等の歴史上の人物の語	2.0	17.2	1.6	

られており、四十三名程度である。それに対し「寒川入道筆記」「戲言養気集」には実名が多く用いられており、昨日は今日の物語の三〜六倍に及ぶ。しかしその用い方は実録風である。これらの実名を含めた人倫語彙を、表2の視点項目で整理し、各作品内での割合をみると、表2の%となる。各

作品の内容の大きさには少々の違いはあるが、それほど差異のないことを前提にして考えると、各々の作品の語彙の傾向が読みとれる。表2で、武家、公家等の割合では、「戲言養気集」(三九・三%)、「寒川入道筆記」(一八・二%)と、昨日は今日の物語(四・八)に比して高い。昨日は今日の物語の六〜三倍の割合のふくらみとなっているが、それは、「戲言養気集」には「検地わひことゝの事、前関白秀吉公御検地帳」「朝鮮国御進発之人数帳」がのせられており、「寒川入道筆記」には、和歌、連歌、物語の注釈書の抜き書きがのせられていることによる。昨日は今日の物語では、公家、武家に関する語より、僧侶に関する語に特色がみられる。三作品の差異は編者の興味と関心のありどころによるものと思われる。

昨日は今日の物語の僧侶に関する語(一八・九%)は他の作品が占める割合にして、二〜三倍と高い。それに稚児・若衆まで含めると差は大きくなる。稚児等は僧の若道の対象となっている。僧は破戒僧が大部分で、高德の僧の話は少ない。その僧に関する異なり語には「和尚・法印・上人・長老・聖・僧・出家・法印・沙弥・新

昨日は今日の物語で、僧以外の語で「われら、そもじ、なんぢ」とは、会話、もしくは話し言葉が昨日は今日の物語に多く、他の二作品は、それに比して少なく、昨日は今日の物語が、（古田東朔氏は読み本的と指摘されたが）他の二作品の読み本的であるに比して嗤し本的であると言える。昨日は今日の物語に実名が少なく、代名詞が多いことと、他の二作品がその逆現象になっていることが対象的である。その代名詞と異なり語は次の如くである。

代名詞(1)

1 (自称)

- ・我ら
- ・愚僧
- ・おれ
- ・わたくし
- ・それがし
- ・われ
- ・わらわ
- ・あこ
- ・われ

2 (対称)

- ・そなた
- ・なんぢ
- ・その方
- ・ぬし
- ・そち
- ・貴所
- ・貴老
- ・貴公
- ・わ殿
- ・そもじ
- ・こなた
- ・をのれめ
- ・(うち)

3 (不定称)

- ・たれ
- ・どなた
- ・(かれ)

「我ら」は「うつけたる者」出家、長老、沙弥、国師のおし、和尚
すて子、今省、鉢開き、傾城、女郎（上臈）、女房、比丘尼」が「
子、上人、旦那、殿ばら、信長、紹巴、稚児、若衆、順礼、出家、
お方様、代官」に対して自分自身のことを指して用いており、相手
のだからかを問わず、自称代名詞としてもっとも自由に用いられて
いたものと考えられる。その他の語については、次の表の如くであ
る。法印が稚児に対して「そもじ」と言い、親が子に対して「わ殿
と言うなど、また親が「むすめをちかつけ、うちのは何ぞ、けいか
あるか」（上16）などの例が見られる。

代名詞②	
使用者→相手	使用者→相手
<p>1 (自称)</p> <p>(おれ)</p> <p>・権児→三位</p> <p>・うつづけたる者→友達共</p> <p>・ござかしき息子→友達</p> <p>(わたくし)</p> <p>・ある人(兵衛殿)→子</p> <p>・比丘尼→代官</p> <p>(それがし)</p> <p>・わやくもの→奉行</p> <p>・念者→若衆</p> <p>・子→親</p> <p>(おわれ)</p> <p>・女房→長老</p> <p>2 (対称)</p> <p>(そなた)</p> <p>・権児→法印</p> <p>・女房→ある人(女)</p> <p>(なんぢ)</p> <p>・親→子</p> <p>・わっぱ→ものいまいする人</p>	<p>(こなた)</p> <p>・医師→病人</p> <p>(そち)</p> <p>・沙弥→権児</p> <p>(貴老)</p> <p>・昭巴→ある人</p> <p>(貴所)</p> <p>・昭巴→達達見の人</p> <p>・明望→ある人</p> <p>・坊主→旦那</p> <p>・鉢間→頭礼</p> <p>(そもじ)</p> <p>・法印→親父</p> <p>・女房→男</p> <p>(わ殿)</p> <p>・親→子</p> <p>(ぬし)</p> <p>・わかしき→娘</p> <p>(おのれめ)</p> <p>・出家→通道人</p> <p>(うち)</p> <p>・父親が自分の娘を</p>

(4) 人倫以外の語と俳諧類船集の語との比較

初期咄本について岡雅彦氏は「咄そのものも……個性をもっている。……それは当然、有名個人の逸話であり、個人と結びつかない場合は日本人が古来愛好してきた言葉の遊び―秀句・洒落などよく利いた咄である」と指摘しているが、昨日は今日の物語には有名個人の逸話より、日本人が古来愛好してきた言葉の遊び―秀句・洒落のよく利いた話が多い。それは、つまり、連歌、俳諧的発想（付合的発想）によるものと考えられる。昨日は今日の物語においては、語の付合的な発想による面白味を楽しむ言葉遊びが大部分を占めていると言える。例えば、下57話は「……まあとこきたり、さま／＼、ちはのあけくに、ねふらすはいやといふ、さらはとて、ゆひにてくしり、其ゆひをのけ、別のをねふる、かのうつけもの、これを見て女共ぬかるな、ての内に、ぬきがあるそ、といふた」という卑猥な話があるが、その卑猥さを明るく面白くしているのは、「ゆび／＼じる」に対して「ての内―ぬき」、「まあとこ―うつけもの」という語の付合（対応のさせ方）によっており、このような語の付合を楽しんだのでなからうか。また、上10話に「ふろやに、かう／＼ふろといふかある、これはいかなるいわれそと、ふしんすれば、さる

人のいはく、是は、ふかふにおよはぬ、といふきりちや……よそにて、ふくにおよはぬ、とかたられた……」という話があるが、この話は「風呂―吹く」の付合を基本にして、「吹かう」と「不孝」をかけ、「孝行」に「不孝」を対比（付合）させたところに面白さがある話である。秀句、洒落に頓智を利かせたものであるが、それが活用されなかったところに嘲笑が湧くことになるのである。このよな広狭両義の語の付合が昨日は今日の物語の各説話にある。そこで付合語の代表的辞典である俳諧類船集の語とどのように重なり合うかを検討してみることも必要であると考えて、異なり語数で比較したのが（表3）である。単純に重なり率をみることには問題はあがあるが、連歌俳諧の話もあるので、昨日は今日の物語を中心にして重なる語のみを類船集から取りあげてみた。昨日は今日の物語の語で類船集の語に重なるものが六一％に及ぶ。以下重なり語のみを示す。（紙巾の都合で重ならない語は省略する）

◎動物に関する語→「A」馬、駒、まき駒、犬、牛、むくり（こくり）の玉子、玉子、かい（卵）、けだもの、尾、鳥、鷺、鷺、雀、雁金、雁、鮑、鮒、蟹、虫、蛭、巢、毛、鬼、ゑのころ、鶯鷲、山杜鵑、から蛙、幽霊

◎植物に関する語→草木、森、藪、竹、桜、柳、山椒、花、もみぢ、竹の子、松茸、生蘆、瓜（ふり）、瓢箪、綿、さね、大木、はちす、植木、笹の葉、牛蒡、根芹、をけら（白ボ）、物種

◎創作、言語等に関する語→能、謡、舞、芝居、芸、日吉が能、隅田川、連歌、歌、絵、学文、短冊、物語、手、文、題、雲林院、頭巾、一字、六字の名号、暦、大黒、奕打、数、浄瑠璃、やゆ、三番叟、勧進能、連句、返歌、色紙、平家物語、読み物、算用、きよがき（清書）、手本、れい文、手跡、筆勢、茶巾、手巾、かんきん（看経）つきなみ（月次） 囃、山王祭、（類船集に重ならない語

（表3）昨日は今日の物語の語を中心しての類船集の語との重なり率（％）

	1植物の語	2動物の語	3創作・言語	4体・姿態の語	5衣服の語	6食物等の語	7仏教の語	8造営物の語	9時の語	10所の語	11自然の語	計
昨日は今日の物語の異なり語数	30	41	88	81	10	35	78	63	58	100	24	688
類船集で重なる語数	25	33	49	49	7	25	40	40	20	60	22	300
昨日は今日の物語の重なり率	83.3	78.6	55.7	60.5	70.0	71.4	51.3	66.7	34.5	60.0	91.7	61.0

（こと、もの、人倫の語は除く）

には語呂合わせの語が多い（例、なんばんしん、ちやうんすん等）―秀句、前句、ぶんてい（文体）、もんこん（文言）、ぬ止りま、返状、御状、朱筆、勅筆、張形等々）

◎食物に関する語→米、餅、汁、味噌、香の物、茶、湯、酒、田楽、ち（乳）、饅頭、団子、内裏粽、飯、饅頭、お茶たう、大福、酒の実、（重ならない語）大唐米、大唐飯、おにやけの実、諸白、ざせんまめ、上様団子等々）

◎体、姿態に関する語→唾、息、声、力、命、耳、口、目、姿、身、指、かたち（像）、腰、血、鼻、足、腹、手、額、髪、顔、尻、歯、脈、少便、片輪、懷妊、思ひ、心、志、気、手の内、男振、肝、頭、喉、ふところ、乳房、怪我、医療（この体、姿態の語は比喩的に用いられる場合が多くある。その用い方は「目↓目しるし、

目にかとをたて、御目にかけう、御目みえ。口↓口がひろい、口をか、えた、しやうじんの口、は口。耳↓み、よりに候。手↓手もと、てまが入申、手をうつ、お手ほん、よきて、まじなひて、手かゝみ、手ずさみ、からめて、大て、手の内。顔↓さそひかは、さらぬかは、あの様なるかは（様子の意）。つら↓三てうにしのつら。腹↓腹をたつる、御腹立。心↓心がおとり申、おとな心、此もとの心、さと心、心はゆるされぬ、御心つかひ、心つけ、心にまかせず候、心中。気↓きのくすり、御きにちかふたる、きのやりやうがわ

るい。精↓せいをいれ。身↓身にあて、お身におうじたるねがひ身につきそふ。軀、態↓さらぬてい、なげきかなしむてい。よそへ行てい。肝↓きをもけし、きもをつぶし、きもいらう。」である。体、姿態の語は名詞総語数の七・三％あるが、卑猥な話以外に体の名称を用い、笑の種にする話も相当あることによる。

◎仏教に関する語→仏、本尊、阿弥陀、経、念仏、法花経、六斎念仏、香花、死出三途、卒都婆、布施、わ(話)、誓文、因果、罪、六道、精進、慈悲、彼岸、幽霊、葬礼、日蓮宗、時宗、禅宗、仏事、お建夜、お名香、袈裟掛、名号、門跡、法、法問、御遺言、回向、調伏、煩惱、引導、談義、親の日、三悪道、(重ならない語→活仏、立仏、弥陀の誓願、経多羅尼、南無の二字、南無阿弥陀仏、安樂国、迦陵頻伽、頓證菩提、浄土宗、勝劣、一致、戒名、呪文、女人成仏、生死一大事、出離生死、後生一大事、旦那ばかり、彼岸の中日等々、)(「所、時」等々は紙巾の都合で省略をした。)

以上、類船集との重なり語を中心に示したが、言葉遊びの世界のひろがりからこれらの語からつかめるだけでなく、付合という点で連歌俳諧と深くかわっていることがわかる。全般的にみて付合による言葉遊びは連歌的発想によるもので、後の咄本の話の質と異なる。

(5) 漢語

昨日は今日の物語に漢語が多く用いられているが、二字以上の熟語(サ変動詞、形容動詞の語幹、副詞化したものも含めて)の異なり語数は三七二語である。(数詞、人倫語は除く)、文明本節用、五本対照改編節用集、下学集、運歩色葉集等の辞書にある語を除いた語が(表4)の漢語である。二、三の語を除けば、俗語的用法のものである。

◎「ふひやう」下16について——「御かたちは天下一、おにやけは、しゅこふ入ちや……しんほちの申やうは、しゅこふにうても御

(表4) 古辞書に見えない漢語

(上)	(下)
りくつ(理屈) (1)	こひつ(古筆) (6)
●とうしやう(登城) (2)	●ふんてい(文体) (11)
●いふう(異風) (11)	代(値)さし (11)
●はうもん(法問) (11)	二そく(閑三文) (15)
ぬすん(値十) (15)	ふひやう (16)
三悪道 (16)	御みまひ(見舞) (28)
さう(反)方 (17)	はんねつ(煩熱) (24)
しやうやく(濠浴) (44)	十全 (34)
●しゆもん(呪文) (45)	ちけい(呪呪) (56)
おふふく(大福) (46)	ちは(幅話) (57)
おちやたう(茶湯) (46)	●こたん(後段) (58)
●おめいかう(命誨) (46)	
しき(式)次第 (52)	
ふ(無)作 (53)	

●印は書言字考に見える語

徴?)となっている。「守護不入」は「わが尻は守護不入」(醒睡笑)「おいどはしゅこふ入る」(戯言)から尻に関したことであり、「ふひやう」はねんじやとねてふびやうを取はづひて出され……此にほひを出さんと」(戯言)、「守護不入のところから、さいく夫のてたを……よくきき参らせたぞ……」(醒睡笑)から「尻」のこをさしている。「守護不入」に対して「ふひやうが出る」と付合っているのだから「ふひやうが出る」は「歩兵が出る・屁(ふひやう)が出る」の秀句的、もじり表現と考えられる。(大東急上51話に尻の穴から山伏の出る話もある。)以上紙幅の都合上、多くの資料を割愛したので不備な点も多くなった。なお漢語、付合の語についての詳述は別の機会に譲りたい。大方の御教示を願いたい。

(石川県教育センター)

さらぬといふ、なにせ、さいく、ふひやうが出るほに」(昨日は今日)とあるが、古活字8・10行本には「ふひやう」、整版9行本には「ふひやう」とあり、戯言養気集の同話には「ふびやう」(二例)とある。大東急本には「ふちやう」(夫